相手意識を大切にしながら進んでコミュニケーションをとろうとする子ども

― 小学６年「道案内をしよう」の実践から ―

１　単元のねらい

ＡＬＴによるカナダの町の道案内を聞き，様々な文化に対する理解を深めるとともに，相手のことを考えてあいさつをしたり，表情や身振り手振りを工夫したりしながら，英語を用いて楽しく積極的に道案内をする。

２　授業の構想

⑴ 子どものとらえについて

次に示すのは，お客さんが幸せを感じることができるハッピーレストランを開くために，店員としてどのように伝えていけばよいかを考える活動を行った際のふりかえりである。

> 最初はぼう読みだったし，下を向いて話していたけど，２回目は相手のほうを見て話せて，ぼう読みではなくて少し気持ちをこめて話せてよかったです。そしたら，みんなの英語も聞き取りやすくなってスラスラ話せました。他の班は，アドリブも入れたと言っていたので，すごいと思いました。　（児童Ａ）

この実践では，３人グループをつくり，店員・客・アドバイザーに分かれてレストランを開いた。児童Ａは店員をした際に，アドバイザーから「お客さんのほうを見て話したほうがいいよ。」というアドバイスを受けた。そのアドバイスに基づいて相手の方を見て話そうとしたことで，気持ちをこめて表現することができるようになっただけでなく，相手の英語もしっかり聞き取ることができるようになった。このように，外国語活動では相手意識をもちながらコミュニケーションをとることを大切にしながら授業を行ってきている。

本学級の子どもたちは好奇心旺盛で，友だちと関わる活動では男女関係なく様々な友だちとコミュニケーションをとることができる。また，上記のようなコミュニケーション活動では，自分のことだけではなく，相手のことも考えながら話したり聞いたりしようとする姿も見られるようになってきた。しかし，新しい言葉や慣れていない表現が出てきた際は，それらの言語を伝えようとすることのみに意識が向き，相手のことを思って話したり聞いたりしようとする姿はなかなか見られないのが現状である。

この実態から，相手意識を大切にしながら，進んで英語でのコミュニケーションを楽しもうとする態度を育てたいと考えた。そのためには，どのようにして伝えたら，相手により伝わりやすくなるのか考えることが大切である。また，進んでコミュニケーションがとりたくなるような場面や状況をつくり，自分の話したことが伝わった喜びや友だちの話したことが理解できた喜びを感じられるようにすることも大切である。そのようにしてコミュニケーションを楽しむ中で，表現に慣れ親しむとともに，相手のことを考えながら話そう・聞こう・関わろうとする思いが高まっていくことが期待できると考えた。

⑵ 本単元の内容と外国語活動で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元では，日本と外国の建物の様子や言い方には違いがあることに気付き，様々な文化に対する理解を深めた。そして，道案内をする中で相手のことを考えてあいさつをしたり，表情や身ぶり手振りを工夫したりして，伝わった喜びや理解できた喜びを感じながら，コミュニケーションを楽

しむことをねらいとした。そのために，単元を構成するに当たって以下の点に留意した。

① よりよい道案内にするために，コミュニケーションをとる際に相手に対して意識するポイントを学び合う機会を設定する

子どもたちは，これまでに相手意識をもちながらコミュニケーションをとることの大切さについて考える経験を積んできている。道案内をする中でも，子どもたちは「より相手に正確に伝えたい，相手から正確に聞き取りたい」という願いや思いをもつ。その願いや思いを大切にして，学級全体でどのようにしたらより相手に伝わるのか，正確に聞き取ることができるのかについて，学び合う機会を設定した。

② 一人一人が道案内をしたりされたりする機会を繰り返し設定する

様々な友だちと積極的にコミュニケーションをとろうとする実態をふまえ，子どもたち一人一人がしっかりと話したり聞いたりすることができる機会を繰り返し設定した。そうすることで，表現に慣れ親しむことができるだけでなく，もっと正確に伝えよう，聞き取ろうという気持ちが生まれると考えた。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

上記の留意点をもとに，本単元を次のような全５時間の構成とした。

第１次では，道案内の表現に慣れ親しむことをねらいとした。ここでは、建物の言い方については全員が英語で言えるようになることを目標としていない。英語と日本語での表し方の違いや共通点について気が付いたことを出し合う中で，言葉についての気付きを育てること目指した。道案内で使用した表現は，以下の通りである。

“Where is ～?”　“Go straight.”　“Turn right.”　“Turn left.”　“It’s on your～.”

子どもたちは道案内の表現を実際に使う中で，伝わった際の喜びだけではなく，伝わらなかった時の悔しさを感じる。その中で，相手の指示が速すぎて聞き取れない，声が小さくて聞き取れない，指示があいまいで理解できないといった伝わりにくさに注目したふりかえりが出てくることを予想した。そこで，そのような困り感やその解決策などを学び合う場を設定することにした。一人一人が，コミュニケーションをとる際に相手に対して意識するポイントをもった上で活動することで，相手意識が高まり，コミュニケーションの質も高まると考えた。

第２次では，第１次で学んだことをいかしながら，たくさんの友だちとのコミュニケーションを楽しむことをねらいとし，子どもたち一人一人が自由に建物を配置してマイオリジナルタウンをつくることを提案することにした。マイオリジナルタウンを作ることで，お互いの町を訪ねてみたいという気持ちが高まり，進んでコミュニケーションをとる姿が見られるようになると考えた。

３　展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は，学び合い）
1	道案内の表現に慣れ親しもう。	1	・建物の言い方や道案内の表現を知る。 Activity１　Meg’s town（カナダ）を紹介してもらおう。 Activity２　Meg’s townを道案内してもらおう。
		2	・道案内の表現を使って練習する。 Activity１　自分たちで道案内を体験してみよう。
		3	・相手意識を大切にしながら，ペアで道案内する。 Activity１　道案内をしてみて困ったことやその解決策などを出し合おう。 Activity２　Activity１で出し合ったことを，道案内で試してみよう。 ◇道案内をしてみて困ったことやその解決策などを出し合うことで，相手に対して意識するポイントを考える。

2	たくさんの友だちとのコミュニケーションを楽しもう。	4	・マイオリジナルタウンをつくる。 Activity１　マイオリジナルタウンをつくろう。 Activity２　ポスターやＣＭの準備をしよう。
		5	・友だちと道案内し合いながらコミュニケーションを楽しむ。 Activity１　マイオリジナルタウンで友だちを道案内したり，友だちのオリジナルタウンで道案内してもらったりする。

４　授業の実際

⑴ 伝わりにくいという難しさから，相手意識について考える子どもたち（学び合いの様子）

第１時でＡＬＴが話す道案内の表現に初めて出会った後，表現に慣れ親しんでいけるように，全員に同じ地図を渡し，ペアで道案内をし合う活動を行った（**図１**）。道案内の表現に少し慣れてきた第２時では，道案内をする側には建物が入っている地図を，道案内をされる側にはマグネットシートで建物を隠した地図（ラミネートしてマジックで書きこむことができるようにしたもの）を用意し，前回とは異なったペアで道案内をする場をつくった。以下は，その際のふりかえりである。

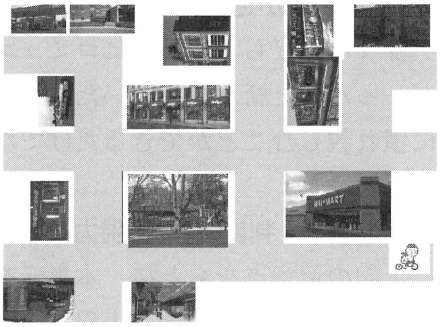

図１：第１時で使用した地図

> 今日は，道案内をしてみて，私のところはペアがすぐできたので，たくさん練習できました。曲がるときとか，難しくて頭がちぎれそうになったけど，やっていくうちに普通に言えるようになれたのでよかったです。建物の名前なども英語で言えるようになりました。　（児童Ｂ）

児童Ｂは，最初は英語を使って道案内することの難しさに戸惑いを感じていた。しかし，回数を重ねるごとに，英語を使って表現できるようになってきた。一方で次のようなふりかえりも見られた。

> 今日は，ペアを組んで道案内をしてみました。遠いところに行くときが難しくて，言っているうちにごっちゃになりました。　（児童Ｃ）

この子どもは，案内する場所が遠い場合，伝えないといけない指示も増えるため，話しているうちに困ってしまったことがあったことについて書いている。このように，多くの児童が正確に伝えることの難しさを感じていた。そこで第３時では，「道案内で相手に対してどんなことを意識するとよいか考えよう」というめあてを設定し，具体的にどのような難しさを感じたのかを話し合った。その際に，話し手・聞き手として互いにどのようなことに意識して関わるとよいかということに視点をおいた。

> Ｔ　：前回のふりかえりでは，道案内をしてみて困ったことを発表したよね。今みんなは道案内をする方もされる方も両方やってみたわけだけど，実際道を訪ねてくる人ってどんな人が多いと思う？
> 児童Ｄ：道を知らない人。
> 児童Ｅ：初めてその町に来た人。
> Ｔ　：そうだよね，道案内は道がよく分からない人にしてあげるんだよね。じゃあ，町を知らない相手に伝えたり，知らない町で相手からしっかり聞き取ったりするためには，どんなことに気を付けたらいいと思う？
> 児童Ｆ：一回一回確かめながら指示を出す。
> 児童Ｇ：ゆっくり伝えてあげる。相手が分かっているかどうか確かめながら。

児童H：自分が知っていることを正確に伝える。
児童I：ぼくは早口だし，よくかんでしまうから，そこに気をつける。ジェスチャーも使って話すといいと思う。
T　：これらは話し手として意識することだね。じゃあ，聞き手としてはどう？
児童J：分からなかったら，もう一度聞き返したり，聞き直したりしたらいい。
児童K：言葉を正確に聞くことも大切。
児童L：分かるまで何度も聞く。それでも分からなかったら，ジェスチャーをお願いする。
T　：聞き手としても意識すると良いポイントはあるね。話し手にしても，聞き手にしても，どちらも「相手」を意識することが大切だということがわかったね。

このような学び合いを通して，話し手と聞き手の両面において，その先には相手が存在することを改めて確認することができた。子どもたちの中には，自分が不十分だと感じている点をもとに意識すべきポイントを考えている子どももいた。その後のコミュニケーション活動では，「OK?」と一つ一つ確認しながら指示を出す話し手や，「Once more?」と聞き返したり「OK!」と分かっていることを示したりしながら聞いている姿が多く見られた。

(2) 話したい・聞きたいという思いが高まっていく子どもたち

第２・３時において，道案内の表現に慣れてくると，渡した地図にオリジナルの場所を付け加えて，その場所まで案内をし合っている子どもも見られるようになった。そこで，第４時には，その姿を全体に紹介し，教師から「一人一人のマイオリジナルタウンをつくってみないか。」と提案したところ，多くの子どもたちが笑顔で賛成した。授業時間内には十分に製作時間を確保することは難しかったが，どの子どもも休み時間や家庭学習の時間を使いながら思い思いのオリジナルタウンを作っていった。

また，以下のふりかえり（第４時）からも，地図が出来上がるにつれて，自分のタウンに来てほしいという気持ちが高まっていったことがわかる。

今日自分の町を作ってみて，自分の考えていた町とみんなの町を比べてみてもおもしろいと思いました。私は自分の好きなものばかりなので，自分らしさがたくさんつまった町ができると思います。友だちのつくる町がどんな町か，とても楽しみです。（児童M）

このような子どもの思いをもとに，さらに教師から「みんなに来てもらうために，ＣＭやポスターを作らないか」と提案したところ，子どもも喜んで賛成した。ここでも子どもはタウン作りと同じくポスター作りにも熱心に取り組み，個性豊かなポスターを仕上げた。また，出来上がった地図には，その子らしさがつまった素敵なタウンが出来上がった（**図２**）。

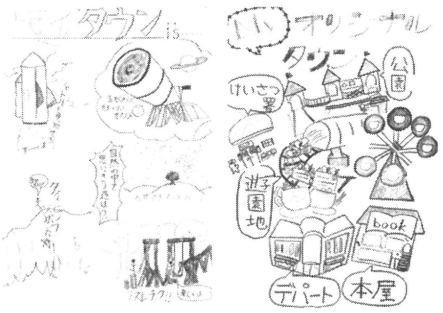

図２：オリジナルタウンのポスター

第５時の前日に，そのポスターを使った一人一人のＣＭタイムをとったところ，自分の町にあるおすすめの場所について，生き生きと宣伝していた。以下は，ＣＭタイムの様子である。

児童N：私のマイタウンでは動物園とかサーカスとか見れて楽しいので，ぜひ来てください。
児童O：ぼくのマイタウンでは，富士山や東シナ海などの自然と，昔風の建物もあるので，ぜひ来てください。
児童P：私のオリジナルタウンでは，全国各地にある有名な神社や坂や天神があるので，来てください。

児童Q：しぶいなぁ～。
児童R：ぼくのオリジナルタウンは，自然と町とのバランスがすごくいいタウンです。滝とか草原とか山脈とかいろんなものがあるので，この町に来て，自然や町を楽しんでください。
児童S：私のマイタウンは，遊園地や本屋さんなど身近にあるお店とかがたくさんそろっているのでぜひ来てください。
児童T：ぼくのマイタウンでは，サファリパークとか水族館とか，そういう生き物がたくさんいるので，生き物が大好きな人はぜひ来てください。
T　：パッと見ただけでも楽しそうなポスターがたくさんあったよね。このポスターどうしておこうか。
児童U：貼っておけば，みんなが見れるからいいんじゃない？
T　：そうだね。じゃあここに貼って，みんなが見れるようにしておきますか。

ポスター作りやCMタイムを通じて，子どもの自分の町に来てもらいたい気持ちがさらに高まっていった。その気持ちが，自分の町を道案内したい（＝話したい），友だちの町を道案内してもらいたい（＝聞きたい），自分の町に来てもらったり，友だちの町に行ったりしたい（＝かかわりたい）という思いにもつながっていったと考える。さらに，自分の好きな場所を紹介したり，友だちの好きなものを聞いたりすることで，お互いの好きなものや新たな一面を知ることもできたという点からみても有意義な活動であったと考えている。

(3) 相手意識をもちながら道案内をし合っている子どもたち

第５時では，これまで準備してきたマイオリジナルタウンをお互いに訪問し合うアクティビティを行った（**図３**）。前半の10分間は，クラスの人数のおよそ半数がマイオリジナルタウンをひらき，残った半数が自由にマイオリジナルタウンを訪れて道案内してもらった。10分たった後は，役割を交代してさらに10分間同じ活動を行った。この活動の中では，普段から自分は早口だと感じている子どもは，大きな声でゆっくりと伝えていたり，rightとleftの区別がつきにくい子どもは，右手や左手を出しながら伝えたりしていた。また，自分の町に来てくれた友だちに楽しんでもらいたいと話していた子どもは，ジェスチャーを大きくしたり，満面の笑顔で“Hello!”と声をかけたり，相手の目を見ながら伝えたりしていた。一人一人が大切にしていきたい相手意識は違うものの，何となく話したり聞いたりするよりも，意識をしながら話したり聞いたりすることで，より相手に伝わったり聞き取れたりすることができたと感じていることが子どものふりかえりからも伝わってくる。

図３：道案内をし合う姿

今日は，大きな声で相手が分かっているかどうか確認しながらやったら，相手から一回も聞き返されることなくできたのでよかったです。あと，聞き取りやすい声の大きさだったから，スムーズにできました。
（児童V）
よかったことは，私が向きを間違えたときに，お客さんがわの人が教えてくれたり，向きがあっていたとき「そうそう」と言ってくれる人がいたりして，うれしかったことです。（児童W）

児童Vは，話し手として，声の大きさや相手の反応に意識を向けながら道案内をしたことで，相手から一度も聞き返されることなくコミュニケーションがとれたことに喜びを感じている。また，児童Wは，話し手と聞き手の両面で，相手がいてこそのコミュニケーションの良さを感じている。以下の表は，教師による授業時の観察と子どもたち自身のふりかえりをもとにしてまとめたものである（**表１**）。

表１：第５時のアクティビティでの子どもたちの姿

相手意識をもって工夫しながら道案内をしたりしてもらったりしてコミュニケーションを楽しんでいる。	道案内をしたりしてもらったりしてコミュニケーションを楽しんでいる。	道案内をしたりしてもらったりしている。
74%（20名）	26%（７名）	０%（０名）

上に挙げた子どもたち以外にも，多くの子どもたちが相手意識をもってコミュニケーションを楽しめたことが分かる。この姿は，外国語活動・英語科でねらっている「いかしている姿」といえるのではないかと考えている。

５　成果と課題

本単元では，道案内という活動を通じて，相手意識を大切にしながら進んでコミュニケーションをとろうとすることができるようになることをねらいとした。子どもたちが話し手・聞き手の両方を体験することで得られた気付きをもとに，相手に対してどのようなことを意識するとよいか学級全体で考えていった。その中で，自分が意識していきたいこと，大切にしていきたいことを決めて取り組んでみるように投げかけることで，その後のコミュニケーション活動で実際にいかしてみようとする姿が見られた。子どもたちからは，「相手に分かりやすく伝わった」「安心して聞くことができた」「どちらも（話し手・聞き手）気持ちよく会話ができた」などというふりかえりがあった。また，子どもたち一人一人が相手に対してどのようなことを意識していこうと考えているのか教師がとらえておくことで，実際のコミュニケーション活動において子どもたちを見る視点が変わり，意欲的な姿を認めることができたり，ちょっとした変容に気付いたりすることもできた。

子どもたちが出し合った相手意識の中には，道案内特有の相手意識（例えば，right/left，１回１回確認しながら･･･）もあれば，どのようなコミュニケーションの場面でも大切にしたい相手意識（例えば，ゆっくり，大きな声，笑顔で，相手の顔を見て，楽しみながら，ジェスチャー，分からなかったら聞き返す･･･）もあった。今回は，相手意識というキーワードに基づいて活動を進めたので，子どもたち自身も意識せざるを得ない状態になっていたのかもしれない。本単元に限らず，どのようなコミュニケーション活動においても大切にしていくとともに，子どもたちが自分から意識しようと思えるようになること，そして，実際に意識しながら友だちと関わろうとする姿を大事にしていきたい。

しかし，課題も残った。たしかに，相手意識を大切にすることで，より伝わったり聞き取れたりする姿も見られたものの，オリジナルタウンを見ながら「〇〇が好きなんだね」「そんなこと知っているんだね」など相手のことを知ろうとする会話はあまり見られなかった。本来，この活動の楽しさである「コミュニケーションをとることでよりお互いのことを知ることができる」というチャンスを生かせていないということである。コミュニケーションをより楽しむために，相手意識を強調しすぎたばかりに，逆に本来コミュニケーションがもっている可能性を狭めてしまうことにつながっていたのではないかと考えている。教師が子どもたちの気付きや思いなどを大切にしながら，コミュニケーションがもっている可能性を探っていきたい。

（文責　関野　淳也　　福島　歩惟）